

### 1. 調査の経過

当発掘調査部ではこれまで藤原宮期の主要な地域についての発掘調査を実施してきており、それぞれに成果をあげているが、同時に宮の外周に関する調査に関しても、すでに南面(第1・29-6次)、北面(第18次)、東面(第24・27・29・32次)などの各調査をおこなってきた。しかし、宮西面についてはまだ調査例も少なく、まとまった面積の調査はできていない。このため、未確定要素を含んだ西南隅について宮の外周諸施設を確認することを目的として調査をおこなったものである。発掘面積は1650㎡であり、5月22日に調査を開始した。

### 2. 検出遺構

**藤原宮期の遺構** 宮の外周施設である大垣2条、内濠2条、外濠2条と斜行溝1条がある。西面大垣SA258は7間、19mを検出している。柱間は2.7m(9尺)で、掘形は一辺が約1.5mあり、いずれも柱を西側に抜き取った痕跡があって、北端の柱抜き穴には瓦が多量に詰め込まれていた。南面大垣SA2900は6間、16mを検出したが、柱間は西面大垣と同じ2.7m(9尺)であるが、掘形は一辺が2mに及ぶ大きさである。すべて南側に柱抜き痕跡がある。

大垣と平行する内濠SD1400・SD502はそれぞれ幅2.2m・1.8mで、深さはともに0.7mあり、三層からなる堆積土の中層からは多数の瓦が出土している。なお、大垣と内濠心との距離はSA258とSD1400間が11.5m、SA2900とSD502間が12mである。大垣の西方15mにある西面外濠SD260は延長27mを検出したが、幅は11m~14mに及ぶ。藤原宮廃絶後から中世に至る間の教度にわたる汜濫と流路の変更によるもので、既調査の例からみると本来は溝幅7m前後とみられる。濠の深さは2.0mあり、層序は砂と粘土の互層からなる10層の堆積があり、各時期にわたる遺物が出土している。南面外濠SD501は大垣の南20mにあり、上端幅は東端で7.5m、西端では幅を増して10m程ある。両外濠ともに現在まで完掘には至っていない。斜行溝SD01は幅2m、深さ0.15mの断面が皿状の浅い溝であり、切り合い関係から大垣SA2900、内濠SD502よりも古い。遺物を含まないため時期の決定ができない。

**藤原宮以後の遺構** 掘立柱建物5棟、櫓1条、井戸4基がある。建物SB01は桁行5間(柱間1.9m)、梁行2間(柱間1.8m)の東西棟であり、SB02は桁行3間(柱間2.6m)、梁行2間(柱間2.1m)の東西棟建物である。SB03は桁行3間(中央間2.4m、両脇間1.5m)、梁行2間(柱間1.6m)の東西棟である。なお、SB02とSB03は切り合い関係からSB03が新しい。また、SB04は桁行2間(柱間1.6m)、梁行2間(柱間2.1m)の総柱建物であり、SB05は桁行3間(柱間2.1m)、梁行2間(柱間1.8m)の総柱建物である。東西櫓SA01は4間(柱間1.8m)の小規模なものである。井戸SE01~03は相接しており、うちSE01は径2.5mの円形の掘形を持ち、埋土中から瓦器片が出土している。いずれも井戸本体については未調査である。SE04は外濠SD260の東岸近くにあり、径0.8mの円形掘形内に曲物を重ねたもので下三段を残し、深さ0.5mある。堰SX01は外濠SD260が半ば埋まって流れを縮小した時期に設けられたもので、人頭大の河原石数十個を並べた簡単な堰であるが、石列間から延喜通宝が出土している。

**藤原宮以前の遺構** 飛鳥川の東岸に近い宮西半部からはこれまでも弥生時代の遺構、遺物が多くみつまっているが、本調査地でもほぼ全域にわたって弥生土器の包含層が広がっている。SK01は径0.3m、深さ0.1mの円形小穴であるが、石器素材のサヌカイト剥片45個がぎっしり詰まっていた。SK02は径2m程の円形土壇で、弥生土器を多く含んでいる。

### 3. 出土遺物

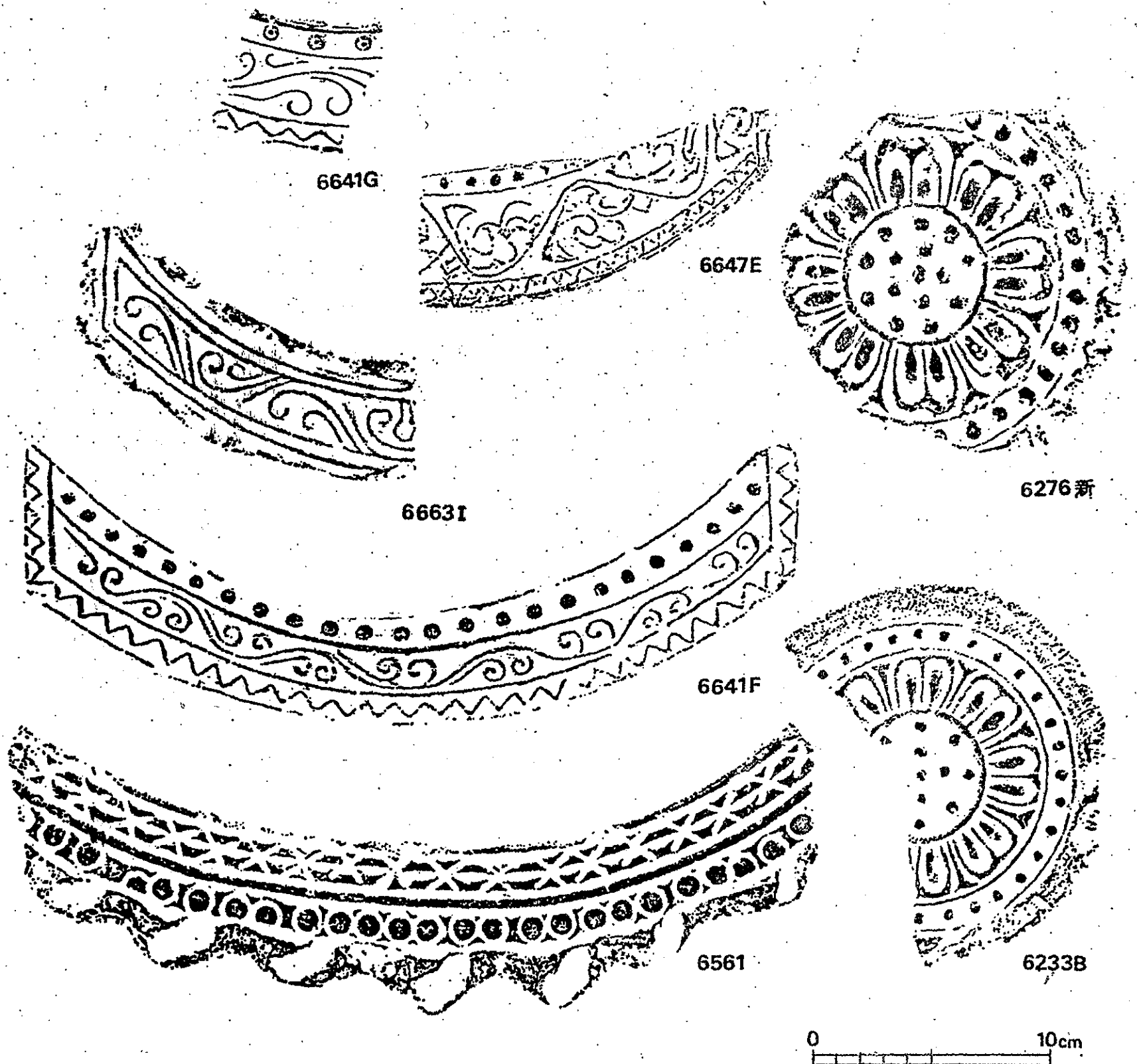
まだ完掘に至らないが、西面外濠からは瓦類、土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器(緑釉、灰釉)、瓦器、磁器、土馬、円面硯、墨書土器、製塩土器、人面土器のほか木製品に等身大人形、削掛け、曲物、櫓があり、延喜通宝、砥石、馬骨、イノシシ骨、桃核など多様である。

瓦類は軒丸瓦2点、軒平瓦39点があり、なかには本薬師寺所用瓦2点が含まれている。墨書土器は10点あり、奈良～平安にかけての土師器、須恵器の杯・皿・蓋の外面に墨書したもので、主なものとしては「(福)器」、「米」「道」、「凡」がある。

外濠以外の遺物としては、内濠からの軒瓦7点、弥生土器(Ⅱ～Ⅴ様式)、銅鏝、分銅形土製品、石器(石包丁、石槍・石鏃)などがある。

#### 4. まとめ

今回の調査で宮西南隅の大垣・内濠・外濠を同時に検出し、外周施設の様相をさらに明確にすることができた。ただ、西面外濠は宮廃絶後の水流が激しく、期待された木簡は現在のところみつかっていないが、濠の堆積層からは中世まで名残りを留めており、飛鳥川から分流していた可能性も含めてその後の外濠の機能の一端を知ることができ、併せて今後の藤原宮西面地域の調査に対する有益な資料が得られたといえよう。



藤原宮跡第3 4次発掘遺構図

